

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.085; 序文

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008622

序 文

研究代表者 波平恵美子

I 本研究の目的と報告書の概要

本報告書は公募による国立民族学博物館共同研究「健康・医療・身体・生殖に関する医療人類学の応用的研究」（代表者：波平恵美子，期間は平成16年10月から平成20年3月まで。平成19年度は成果報告のあり方を検討する会議開催のために延期が認められたものである）の成果報告を目的とするものである。

本研究会は，人類学が応用・実践の場において発見したり担うことになる問題を主として医療人類学の領域における方法論と理論とを再検討することによって，研究分野として発展することを目的として組織された。

活動は，組織メンバーのほかにゲストスピーカーを迎えて研究報告をしてもらい，それを基に議論する館内研究会に加え，「サテライト・シンポジウム」として，札幌，東京（計2回），宇部において合計4回のシンポジウムを開催した。館外でシンポジウムを開催した理由は，国立民族学博物館内だけではなく，他地方で開催することにより，より多くの文化人類学以外の参加者を得ることができること，その結果，応用・実践の人類学に対するより幅広い意見や反応を知ることができると考えたからである。4回のシンポジウムは「活動報告」に示すとおり，いずれも他機関や団体との共催であり，うち3回は市民参加も視野に入れて公開とした。いずれも多くの参加者を得ることができ，研究会メンバー以外のシンポジウム発言者からも活発な議論が行われた。

本報告書は①論文，②サテライト・シンポジウムの記録，ゲストスピーカーの研究会報告から成る。なお，論文は研究会での報告および議論にほぼ即したものと，議論を基に発展させたものがある。

本研究会を構成したメンバーは，研究代表者の波平恵美子をはじめ医療人類学の領域で研究を行う小田博志，星野晋，松岡悦子，道信良子，そして，精神医学と国際保健の専門家である新福尚隆，精神医学の立場から医療人類学の研究を行う江口重幸（平成17年度まで），ジェンダー研究と家族・親族研究の立場から生殖と文化の研究を行う仲川裕里と加賀谷真梨，社会福祉のテーマにおける応用人類学の研究を行う宮下克也，さらに，多様な研究へのコメンテーターとして田村克己（国立民族学博物館教授）の計11名であった。

研究会を重ねるうちに，応用人類学や実践人類学における方法論や理論の検討さらには質的研究と文化人類学との関係性にメンバーの多くが関心を持つようになった。論文がいずれも，応用や実践の「フィールド」と人類学者との関係性を重要なテーマとしてと

らえているのはそのような経緯を反映している。

本報告書の第1稿が完成した2007年12月時点での直近の『文化人類学研究』72巻3号は「人類学的フィールドワークとは何か」と題して特集を組んでいる。その中で関根久雄は「対話するフィールド、協働するフィールド——開発援助と人類学の〈実践〉スタイル——」と題して、開発援助の実務に携わる人々と人類学者との相互関係のあり方を「対話」と「協働」の視点から捉えて、フィールドにおける人類学者の応用的実践スタイルを提示しようとしている（pp. 361-377）。

同様の関心は、本研究会のメンバーもまた抱いたものであり、それを「〈現場〉からの挑戦・〈現場〉への挑戦」のタイトルで、2006年6月の日本文化人類学研究大会における分科会で報告した。本報告書の小田論文は、人類学が社会的実践の現場に係る時必然的に生じる「現場」概念の検討を行おうとするものであり、仲川論文は、人類学の応用には、いくなれば「派遣・参入型」と「レンタル型」とがあるとして、それぞれが持つ問題、共通して持つ問題、認識のズレを小さくしていくための方法を論じている。星野と道信の論文は、その論点はやや異なるが、いずれも人類学の立場で医療実践者となる学生たちの教育を行う学部で、文化人類学の教育を行うことから生じる問題もまた応用・実践の人類学の研究対象であることを示している。宮下、加賀谷、仲川の2本目の論文、松岡、波平の論文は、福祉、性教育、出産、臓器移植をテーマに、応用人類学の事例を論じると共に、その方法論および研究を行ううえで直面する問題を取り上げている。新福の論文は、国際保健の実務の経験から応用学としての医療人類学の有効性と問題点を論じたものである。

研究会およびサテライト・シンポジウムで明らかになった様々な問題は、応用人類学の有効性と、それが有効であることを目指すことによって、文化人類学の理論と方法は一層成熟するものであると本研究会のメンバーに確信させるものであった。

また、本研究会の特徴は、豊かな臨床経験を持つ医師であり、かつ研究者でもあり、国際医療協力の中核としての経験を持つ方々を研究会メンバーとしてあるいは、ゲストスピーカーとして迎えることができたことである。本務の仕事の都合で、残念ながら江口重幸氏は平成17年度までの参加となったが、氏の医療人類学の研究者としてのそして精神科医としての蓄積は、文化人類学を基盤とするメンバーに大きな刺激を与えてくれた。新福尚隆氏は、本務多忙のため、すべての研究会出席とはならなかったが、出席の度に医療人類学の持つ可能性と問題点について鋭いコメントを与えてくれた。又二人のゲストスピーカー萱場一則氏と白浜雅司氏とは、長年にわたる地域医療に従事してこられた経験に基づき、実に刺激的な報告をしていただいた。ここに深く感謝申し上げる。

II 実践的人類学の必要性：文化人類学としての葛藤を抱えるなかで

1 〈パラダイム知〉とマイナー・サイエンスとしての文化人類学

言語、音、記憶、演劇のテーマから身体技法に到るまで、幅広く人間の文化を研究対象としてきた川田順造は、2004年刊の『人類学的認識論のために』の序において、人類学的認識の独自性を次のように述べている。

「細分化され専門化の進んだ現代の学問状況で、人類の来た道、行く末を広い視野で考察する研究領域が必要であるとして、それならどのような視角と方法によって、人類学はその要求に応えられるだろうか。私は、人類学者個人としての「私」が、その慣れ親しんだ文化から著しく距たった文化のなかでの、長期の住み込み調査、感性がノック・ダウンされ、価値観も分解されてしまうような生活を通じて観察し体得する、ことば、ふるまい、感覚、等々からなる体験知と、人類についての極大（傍点は波平による）のパラダイム知とが結び合わされるところに、人類学的認識の独自性があるのではないかと思う。」¹⁾

また、川田は「極大」という数学における用語を借りるのは、「人類についての知も、新しい資料の発見や理論の展開によって、知識全体の枠組みであるパラダイムが更新され得る〈パラダイム知〉（川田によれば、体験知が定性分析を研究方法として採るのに対して、パラダイム知は主たる研究方法として定量分析を採る）として、ある時期と範囲で成り立つものであることを、人類学者自身が自覚する上で意味があると思うからだ」²⁾とも述べている。身体技法の研究においては、人間工学（キネシオロジー）の専門家との共同研究を行うなど、「閉鎖系の知：つまりパラダイム知」をめざす人々との共同研究も行ってきた川田の得た、注目すべき人類学的認識論である。川田はそのように明記していないものの、文化人類学におけるパラダイム知と体験知との融合の必要性を主張しているように思われる。その点において、医療人類学はその融合のもっとも望ましいかたちのひとつである。

その川田はまた、「人類学の特徴はマイナーなものへの執着にあり、したがって学問としての位置づけにおいてもマイナー・サイエンスであらざるを得ず、人類学者はそのことに喜びをもつべき」³⁾と言い、マイナーであることによってこそ、人類学のこころざしのひとつである、近代というものの総体を、根底から相対化することができる、という⁴⁾。グローバル化の進行に伴って近代化の弊害がますます顕著になってきている2008年現在の世界において、文化人類学のこころざしを抱く者は一層その覚悟の程を試されることになる。

しかし、近代化そしてその発展型ともいえるグローバル化は、文化人類学にマイナー・サイエンスとしての地位さえも与えようとしないう傾向が顕著になってきている。第2次

大戦終結後、日本の新しい学校教育制度の中で民主化教育の象徴的位置づけにあった大学の教養教育は、1990年代に入って始まった「大綱化」の名の下に、ほぼ完全に制度的基盤を失い、教養教育の教科目として、1970年代以降一応の地位を築いてきた文化人類学は、科目名の変更と共に、その独自の理論を展開する場を失うことになった。「大学教育の場だけが、文化人類学という学問が発展する場ではない」と言うことは決してできない。なぜなら、社会的認知を得なければ研究の経済的基盤は得られず、研究者は身分保証がなくては海外調査は行い得ない。明治維新以降、学校教育をとおして専ら知の開拓と研究者の組織的再生産を行ってきた日本社会において、大学教育の中で専門領域名を維持できなくなった状況のもとで研究者の再生産を行うことには大きな困難を伴うことになる。文化人類学がマイナー・サイエンスであり、メタ・サイエンスであるところに自らのアイデンティティを求めれば求めるほど、全く逆説的であるが、学問領域名が大学教育の中に制度として位置づけられることの重要性が増すのである。

学問領域が独自性を追い求めれば求めるほど、その位置づけはマイナーなものになる。また、他領域に対して刺激や影響を与える力が強ければ強いほど、そのテーマや概念や用語は他領域によって借用される傾向は強くなり、文化人類学はその独自性を保つためにはさらに新しい理論を切り拓く必要に迫られる。文化人類学の研究者が常に新しい理論に貪欲であるのは、自らの理論がマイナーであり、そのため、他領域によって借用されることが生き残る最善の方法であることから、止むを得ず採用している生き残り戦略といえる。

2 質的研究の雄としての文化人類学とそれが抱える問題

ところで、文化人類学の方法論の特徴は質的分析（川田の先の文献では「定性分析」とされている）であるが、現在、多くの人文社会科学の分野が一般にはそのようにみなされている質的研究の中でも、文化人類学は特別な位置づけを持っている。なぜなら人間の生き方、生きることの意味づけ、世界についての認識や理解の仕方に多様性があることを、文化人類学は、具体的な行為の直接の観察と、インタビュー、語り分析、ライフヒストリー分析など質的研究において採用されている手法や方法を用いることによって明らかにしてきたからである⁵⁾。そして、それらの手法や方法は、いずれも文化人類学が1世紀近くをかけて発展させたものである。質的研究という方法が他領域にも一般的になった現在でも、〈パラダイム知〉に対して、そのパラダイムの変更を迫るものとしての文化人類学の絶対的に優位な位置は揺らぐことはないといえる。量的分析（川田の前掲書では「定量分析」とされている）が分析対象とする「現象」の枠組みに質的研究が変更を促すことも生じてくる。そして、質的研究もまた、量的研究による結果を自らの総合的分析の資料の一部として取り込みながら、その質的研究のレベルを上げることになる。つまり、「人間とは何か」を明らかにしようとする時、質的研究と量的研究

はその直接の目的や採用される方法は異るとはいえ、両者は対立するというより補完的なものであると考えることができる。

とはいえ、専ら量的研究を方法論として採用している研究者が、質的研究の結果を理解し、同意し、さらに量的研究に質的研究の結果を取り入れたうえで、そのパラダイムの変換を行うに到るまでには、それなりの工夫が質的研究の側に求められる。質的研究を行う側が同じく質的研究を行う研究者のみをオーディエンスにした場合には求められることの少ない表現方法や議論の展開までも検討し相対化する必要がある。

3 文化人類学を相対化し鍛える場としての応用人類学・実践人類学

- (1) ひとり、文化人類学だけの問題ではないが、文化人類学が特に解説やその意味内容を確認することなしに用いている専門用語や概念を、他領域のオーディエンスを対象に議論する時、どの程度まで用語や概念の内容に言及しながら議論を展開するか。文化人類学の研究者が仲間内に向けて研究成果を発表する場合、用語や概念は発表者とオーディエンス共にすっかり内面化していることが多く、文化人類学が独自性を保とうとすればするほど、用語や概念は他の領域のそれとは差異を大きくすることになる。例えば、「文化」という最も基本的で文化人類学ではそれを変更することも譲歩することも不可能な中心的な概念をどのように提示し他領域の人々に理解してもらい、さらに、共通した概念として用いながら共通の議論が可能かどうか、理論的にも技術的にも問題となる。
- (2) 文化人類学が用い始めた用語や概念を、他領域が用いる場合、多くは簡略化されたり、文化人類学本来の意味の一部のみを取り込んだ用語としているなど「矮小化」されている。例えば「通過儀礼」は文化人類学（民族学）においては重要な概念や理論を含む専門用語である。しかし、社会学や心理学、教育学では専ら「人生儀礼」「成長儀礼」の意味でごく狭く限定されて用いられており、文化人類学における境界理論を踏まえた概念としては理解されていないし、議論されることはない。文化人類学がその独自性の故に人文・社会科学の中でさえもマイナーであるとする、その影響力は、文化人類学をメジャーな位置へと引き上げるより、むしろ「消費され」るだけになる。他領域にとって利用されやすい部分だけが、「つまみ喰い」のように取り入れられ、やがてそれが一般に流布するようになると、本来の文化人類学用語の内容や概念、また積み上げられた議論はかえって理解されにくくなる。これらの問題は(1)の問題よりも、文化人類学が他領域と場を共有する時には深刻であると考えられる。

しかし、以上の問題を文化人類学の研究者の側が認識し、改めて文化人類学の持つ質的研究としての独自性と先鋭性を検証することによって、より洗練された、他の質的研

究に対してより影響力の強い領域として発展することができるであろう。実践人類学・応用人類学は文化人類学を鍛え直す場でもあるといえる。

注

- 1) 川田順造 2004『人類学的認識論のために』p. 5, 東京:岩波書店。
- 2) 上掲書, p. 6。
- 3) 上掲書, p. 1。
- 4) 上掲書, pp. 1-2。
- 5) 波平恵美子・道信良子 2005『質的研究 Step by Step—すぐれた論文作成をめざして』pp. 1-13, 東京:医学書院。